

MJOT 会報

第19回日本語スピーチコンテストに審査員として参加して

在ハンガリー日本商工会

2012年幹事 松山浩明

3月11日の日曜日、ブダペスト市内のセント・ラースロー高校で開催された第19回日本語スピーチコンテストに、商工会を代表し、審査員として参加させていただきました。商工会は基本的にハンガリーに進出している日本企業の団体ですので、私もハンガリーにある日系企業で働く会社員であり、日本語教育については、全く何の知識も経験も無い者です。その為、日本語教育の専門家から見ると、かなりの外れの採点をしてしまったのではないかと危惧しております。参加者のレベルが非常に高く、私にとっては甲乙つけ難いという場合が多かったのですが、無理にでも順位をつける必要がありましたので、結局は自分の感性に頼った、単なる「好み」も含めての採点になっていたと思います。何卒、ご容赦ください。

今回のスピーチコンテストでは、まず、何よりも参加者の日本語能力のレベルの高さに驚かされました。それ程長い年月日本語を学習しているはずのない高校生でも、みな非常に流暢に話されましたし、大学生以上の方のスピーチについては、外国人の方の日本語のスピーチであることを意識することなく、話の内容に引き込まれるくらい、自然な日本語で話される方が多かったと思います。

スピーチの内容についても、取り上げられているテーマがバラエティに富んでいることに加え、話の組み立て方もよく工夫されている場合が多く、非常に楽しませていただいたと思います。

日本から遠く離れたハンガリーで、多くの若者が、日本に興味を持ち、この様に熱心に日本語を学習してくれていることに触れることができ、日本人として、非常に嬉しく、光栄なことだと思います。日本語の学習が進み、日本への理解が深まるにつれて、日本の社会や日本人について、いろいろな面が見えて来るものと思います。日本をより深く理解していただいた上で、日本に対して何がしかの好意を持って見ていただけるなら、これ程嬉しいことはないと思います。

3月11日は、東日本大震災からちょうど一年目の日に当たっていました。スピーチコンテストでも、冒頭で犠牲者の方々へ黙祷をささげていただきました。また、多くのコンテスト参加者が、東日本大震災のことに言及され、被災者への支援の気持ちを表していただきましたし、震災以来、募金活動などを通じて、多くのご支援をいただいたとお聞きしております。ハンガリーの方々の暖かいお気持ちに対して、心より、御礼申し上げます。

第19回日本語スピーチコンテストのご報告

第19回スピーチコンテスト実行委員長

内川かずみ

不勉強な私^{ふべんきょう わたくし}がただ受動的に耳にする限りでも、日本語スピーチコンテスト（以下スピコン）というのは、世界中^{せかいじゅう}のかなり多く^{おおく}の国^{くに}で行われているようです。一方、その中身は千差万別^{せんさばんべつ}です。優勝者^{ゆうしょうしゃ}には日本往復航空券^{にっぽんおうふくこうくうけん}+JR周遊券^{しゅうゆうけん}+デジカメ^{でじかめ}+当月月刊紙^{とうごくげつかんし}一年無料購読^{いちねんむりょうこうどく}+色々^{いろいろう}が授与^{じゅよ}されるという豪華^{ごうか}なところ。発表者^{はつぷようしゃ}に日本滞在期間^{にっぽんたざいきかん}の制限^{せいげん}が全くないところ。いくつかの国が合同^{ごうどう}で行い、各国^{かくこく}での予選^{よせん}を勝ち抜いた上で本番^{ほんばん}に臨むため、参加者^{さんか}には国のプライド^{うらやま}がかかっているところ。感動^{かんとく}したスポンサーから「次回は車一台^{くるまいちだい}を賞品^{しょうひん}として提供^{ていきよう}します」といわれ、発表者^{はつぷようしゃ}は学生^{がくせい}が大半^{たいはん}なので丁重^{ていじゆう}にお断り^{ことわ}したというところ。あえて順位^{じゆんい}をつけず、全員^{ぜんいん}が賞品^{しょうひん}をもらうことになっているところ。国民性^{こくみんせい}を反映^{はんえい}して、かなり煽動的^{せんどうてき}で熱いスピーチばかりが聞かれるところ。以上、ほとんどが、その国で直接^{ちよくせつ}スピコンに関わった方^{かた}から伺った話^{はなし}です。

ハンガリーでは、スピーチ部門^{ぶもん}は「高校生^{こうこうせい}の部^ぶ」、「大学生一般^{だいがくせい}・初中級^{しゅちゅうきゆう}の部^ぶ」、「大学生一般^{だいがくせい}・上級^{じやうきゆう}の部^ぶ」の3つに分かれています。今年度は高校生^{こうこうせい}の部に5名^{ごう}（うち1名欠席^{けつせき}）、初中級^{しゅちゅうきゆう}の部に3名、上級^{じやうきゆう}の部に7名（うち1名欠席^{けつせき}）の応募^{おうぼ}がありました。総じて、どの部門^{ぶもん}のどの発表者^{はつぷようしゃ}のスピーチも、個性^{こせい}が光るすばらしいものでした。自分の言いたいこと^{じぶん}を限られた時間^{かぎ}の中に組み込み^{じかん}、練習^{なかく}し、大勢^{おおい}の観衆^{かんしゆう}の前^{まえ}で外国語^{がいこくご}で発表^{はつぷ}するというのは、決して簡単^{かんたん}なことではありません。今年は特に高校生^{こうこうせい}の部^ぶと初中級^{しゅちゅうきゆう}の部^ぶのレベルが高く、これはハンガリー全体のレベル^{ぜんたい}の向上^{こうじやう}によるものでもあるのではないかと感じました。

パフォーマンス部門^{けい}には計64名^{さんか}の参加^{さんか}がありました。かわいらしい小学生^{しょうがくせい}の朗読^{ろうどく}や演奏^{えんそう}や演劇^{えんげき}、高校生^{こうこうせい}の優しい歌声^{うたごえ}や華やかなおどりに、会場^{かいじやう}は大いに沸きました。見ている間^{みている}、「来年^{らいねん}は私も歌^{うた}で学生^{がくせい}を出したいなあ」という野望^{やぼう}が頭^{あたま}をよぎりましたが、実際^{じつさい}、団体^{だんたい}の指導^{しどう}はそんなに簡単なものではないはず。指導^{しんどう}される先生方^{せんせいがた}には本当に敬服^{けいふく}いたします。

そのほか、来年度のポスター候補作品^{こうぼしゆ}や書道作品^{しゆどう}の展示^{てんじ}、学生ボランティア^{がくせい}の募集^{ぼしゆう}などもあり、例年同様^{れいねんどうじやう}、できるだけいろいろな形^{かたち}で参加^{さんか}できるスピコンを目指^{めざ}しました。各国^{かくこく}それぞれのスピコンが存在^{そんざい}する中で、これがきっとハンガリーのスピコンの特徴^{とくちょう}と言えれば特徴^{とくちょう}なのではないかと思っています。日本語^{にっぽんご}を学ぶ人^{まなぶひと}が増加^{ぞうか}の一途^{いっとう}をたどっている昨今^{さつこん}、勉強^{べんきやう}さえすれば栄えある日本企業^{にっぽんけいぎや}での就職^{しゆうしよくぐち}口^{ぐち}が待っている、という時代^{じだい}は終わってしまっていると聞きます。しかし、語学^{ごがく}の習得^{しゆうとく}は就職^{しゆうしよくぐち}のためだけのものではありません。日本語^{にっぽんご}を使う^{つか}って何か^{なに}を得^えてもらう。決して、単^{ただ}に賞品^{しょうひん}や名誉^{めいよ}という意味^{いみ}だけではなく、人^{ひと}として、何か^{なに}を得^える。一年^{いちねん}に一度^{いちど}、そういう場^ばが存在^{そんざい}することの意義^{いぎ}を改めて確^{あたら}かめた大会^{たいかい}でした。少なくとも私自身^{じしん}にとって、スピコンはそういう場^ばでした。

奇しくも3月11日^くに行われた今大会^{こんたいかい}は、東日本大震災^{ひがしにほんだいしんさい}の被災者^{ひさいしや}への黙祷^{もくとう}に始まり、国際交流基金^{こくさいこうりゅうききん}提供^{ていきよう}の「Light Up Nippon」（被災地^{ひなびたいち}での花火大会^{はなびたいかい}の企画運営^{きかくうんえい}に関するドキュメンタリー・ビデオ）を見て終わりました。スピーチの中にも震災^{しんさい}に触れたものも多く、震災^{しんさい}の復興^{ふっこう}をテーマにした展示物^{てんじぶつ}もありました。昨年^{さくねん}と同様^{どうじやう}、例年以上^{れいねんじゆう}に日本のことを思うスピコンとなったのではないかと思います。

最後^{さいご}になりましたが、今年もご支援^{しえん}・ご協力^{きやうりやく}くださった各スポンサー様^{かく}、MJOT会員の皆様^{かいいん}の方々^{かたがた}、会場^{かいじやう}のセント・ラースロー高校^{しんつじやうしや}、出場者^{しゅつじやうしや}のみなさん、ご指導^{しんどう}くださった先生方^{せんせい}、観客^{くわんかく}としてご来場^{らいじやう}くださった皆様^{みなさま}に厚^{あつ}く、厚^{あつ}く、御礼^{おんれい}申し上げます。

スピーチコンテストの裏方として働いて

エトヴェシュ・ロラード大学 (ELTE)

小野 久禎

私がハンガリーに住み始めたのは 2006 年の夏だったのですが、ハンガリーに来た当時は日本語教師の仕事が見つけられませんでした。そのため、昼は民間企業で働きながら週 1 回国際交流基金で日本語を教え、いつか本業も日本語教師に戻りたい（以前はラトビアで日本語を教えていました）とおもっていました。

そんな中、佐藤節子先生がハンガリーのスピーチコンテスト（以下、スピコン）の手伝いをしないかと誘っていただきました。2006 年の第 14 回大会は個人的な都合によりお手伝いできなかったのですが、第 15 回大会から会計や集計の仕事などでスピコンに携わるようになりました。

今年の第 19 回大会からスピコン実行委員を外れたので、会計の仕事はなくなったのですが、今年も集計係として会場の裏でスピコンに携わりました。裏方で仕事をするとすれば、スピコン当日に自分の学生のスピーチを聞きに会場へ自由に行くことはできません（私が第 15 回大会に集計係になったのは、そのためでもあります。当時は民間企業で働いていたので、自分の学生の発表はありませんでした）。しかし、裏方はずつとつまらない仕事ではなく、毎年いい勉強になっています。民間で働いていた時は、コーディネートの仕事が多かったので、裏方の仕事は日々の経験を日本語教育で活かせるチャンスだったのですが、現在は見方が 180 度変わりました。私達日本語教師は、学生達に敬語の使い方やビジネスマナーを教えるなくてはならない場面に直面することがしばしばありますが、日本語教育と関係のない分野の方と話をすることはたいへん少ないと思います。私達が普通と思っている応対や敬語の使い方が業種によっては普通でないことがあります。日本語を教えている以上、日本語がどのように使われているか常に注意することは生きた日本語を教える上で重要だと思います。裏方の仕事は、ハンガリーではあまり機会のない他業種の生きた日本語に接することができる貴重なチャンスの一つです。

私が子供のとき、両親はよくサーカスの脇役の重要性を話していました。脇役がしっかり仕事をするから主役が光るのだという話でした。ただ、この仕事をして、裏方の仕事は単に自己犠牲の精神で主役を光らせることではないと感じました。点数の集計は間違いがあってもいけないので、今年も点数入力作業はたいへん緊張しましたが、裏方には裏方の楽しい要素があります。それを具体的に言葉にするのは難しいですが、スピコンの仕事をしたが、いきなり中心的な仕事をする自信がないという方にはお勧めです。裏方はステージの仕事と違い、スピコンの始まりから終わりまで気を張り詰めている必要はありません。仕事をしなければならない時間帯に集中してやればリラックスできます。例えば、賞状の名前書きの仕事の後は、毎年、書道の先生と話をし、いろいろと面白い話を伺っています。また、スピコンの運営の全体像を見やすいのも裏方の仕事の特徴です。この「全体像がつかめる」というのは、私達が日々の業務で何かイベントを企画しなくてはいけなくなったときにたいへん役に立ちます。ラトビアで日本語を教えていたとき、同僚が「いい日本語教師になるためには、日本語を教えるだけでなく、いろいろなことを経験することだ」と言っていました。正にその通りだと思います。日本語教師を始めたばかりで自分の経験に自信のない方にスピコンの仕事はお勧めです。来年はスピコンに参加してみませんか。

「中東欧日本語教育研修会2012」を終えて

国際交流基金ブダペスト日本文化センター
境田 徹

2月18日(土)・19日(日)、「中東欧日本語教育研修会2012」が、一日半の日程でブダペストの Goethe Institute を会場に開催されました。今年は「課題遂行学習における授業実践と教授法」をテーマに、現在中東欧の日本語教育の各現場において CEFR、JF 日本語教育スタンダード(以下 JFSD)による授業実践がどのように行われているのか、また、今後どのようなかたちで取り込んでいける可能性があるのかについて、参加者が把握し、考察するためのプログラムが組まれました。具体的には、プログラムの柱は次の4点です。

- ① CEFR、JFSD について共通理解をはかり、課題遂行学習の要点を理解するための基調講演
- ② 参加者による課題遂行型学習の実践発表
- ③ 課題遂行型の授業を行うための着目点、授業の組み立てを考えるワークショップ
- ④ JFSTD に基づいて開発された日本語初級用教科書『まるごと』を使ったワークショップ

今回の研修では、課題遂行学習型学習について先行して取り組みを進めている国際交流基金ロンドン日本文化センター福島青史日本語上級専門家、同マドリッド日本文化センター熊野七絵日本語上級専門家の2名を招き、基調講演、ワークショップの講師をお願いしました。ハンガリーで日本語を教えている多くの方はご存知かと思いますが、福島氏は2007年8月から三年間国際交流基金ブダペスト日本文化センターで業務し、昨年8月に一冊目が出版となった日本・ハンガリー協力フォーラム事業のプロジェクトの一つである日本語教科書『できる』の制作を担ってきました。欧州で言語教育の基盤として CEFR が浸透しつつあるなか、『できる』は CEFR に沿った日本語教科書の先駆けとして完成前から欧州で注目を集めてきましたが、今回の福島氏による「CEFR の文脈化と JF 日本語教育スタンダードの利用ーハンガリーの教材プロジェクトを例としてー」という題目の基調講演では CEFR の理念がどう具現化されたのかが完成した教科書とともに示され、あらためて参加者から高い関心が寄せられていました。また、今回の研修会では JFSD に沿った新しい教科書『まるごと』をもとに熊野氏によるワークショップが行われました。今回、課題遂行型の新しい二冊の教科書を通して、実践とともに授業活動の要点を参加者が把握できたことは研修の大きな成果であったと言えます。

さらに、参加者からたいへん有意義だったこととして実施後のアンケートにあげられていたのは、各国の参加者による実践発表です。今回の研修では6カ国12機関からの発表があり、実際に CEFR や JFSD を活用して授業活動にどう反映させているかが紹介されました。それらの事例は、変革期のなかで日本語を教える教師に方向性を示してくれるものであり、今後各現場において新たなかたちで展開されていく可能性をもつものであったように思います。

この中東欧日本語教育研修会は中東欧地域で日本語教育を行っているほとんどの国からの教師が参加する唯一の研修会として、ここ数年毎年二月にブダペストで開催されています。異なる国の先生方とともに研修を受けることは、現在の自分の実践を見つめ直し、自信を得る機会ともなります。さらに、新しい情報を交換しあえる場、今後のネットワークをつくる場ともなります。このような研修会をブダペストで開催できたことに感謝し、参加してくださった先生方にお礼を申し上げますとともに、来年、さらに多くの先生がこの機会を役立ててくださることを願っています。

中東欧日本語教育研修会2012感想

西ハンガリー大学
永田 淑美

「課題遂行型学習における授業実践と教授法」というテーマで行われた今年の研修会に参加させていただいた。Győr(ブダペストとウィーンのちょうど中間にある小さな町)での生活が始まり、ちょうど7か月、先日3月11日には、東日本大震災の追悼コンサートが催された。Győr在住の日本人は、私も含めわずか6人、そのうちバレエダンサー、ピアニスト、ヴァイオラ奏者としてこちらのバレエ団、オーケストラで活躍している3人の共演で、200人収容のシナゴグが満席となるすばらしいもので、最後のふるさとの演奏に思わず涙があふれ、日本人であることをいろいろな意味で再認識させられた。一年前のあの日、私は新宿で生徒さんの前に立っていた。今までに経験したことのない激しい揺れが続き、「帰宅難民」という言葉を実体験し、3時間歩いて自宅に戻った。その後、東京の日本語学校の生徒数は激減し、日本語教育のあり方を再考させられる出来事にもなった。

さて、Győrでは、西ハンガリー大学とセーチェニー大学で選択科目として、週1回の日本語の授業を担当。レベルは、全くの初心者からその継続クラス、A1レベルの学生さんがほとんど、前学期は、全くの初心者クラスが4、その上のクラスが3という状況に、出席者の顔ぶれもなかなか定まらず、文法事項の復習、確認で思うように課が進められず、そんな毎日に、私自身モチベーションが低下していたそんな折、この研修に参加させていただき、とてもいい刺激となり、たくさんのことを学ばせていただいた。

各国の課題遂行型学習の授業実践についての発表に続き、ワークショップが行われた。日本学科の必修科目という位置づけで実践できる課題遂行学習の発表は、週1.5時間の我が現状では、およびもつかず、正直うらやましい思いで聴かせていただいた。そこで、ワークショップでは、A1,A2レベルの学生になにができるかを考え、プレゼンテーションのグループにお願いいただいた。みんなの「Can-do」サイトを使い、「コース目標を探り、何ができたら合格なのか？」を考えていった。

- ・タスク: 講演やプレゼンテーションをする

- ・レベル: A2

- ・Can-do: 身近な話題について、短い、練習済みの基本的なプレゼンテーションができる

- ＊前後のレベルを比較し、目標を設定し学習内容を考える

- ・評価基準: 母語話者以外には、理解できないこともあるが、本人が何を言おうとしているの

かは、たいていの場合あきらかである。

やはり、A2レベルで、難しいのは評価の点、プレゼンテーションのやり方によっては、視覚的な助けがあり、課題遂行は可能であっても、はたして聞いている多くの学生には、日本語だけでは理解できないとしたら、A2レベルで行うことは意味があるのか、学生のやる気、モチベーションの維持の点で意味があるのではないかと話し合っていると時間で時間切れとなった。が、今学期の最後には、身近な話題、Győrの町のことを日本人に説明するというプレゼンテーションに取り組んでもらうという目標ができた。また、漫画、川柳、和歌を授業に取り入れた報告も、とても興味深いもので、Győrの町には、日本食レストランがなく、寿司の言葉は知っていても、食べたことのない学生がほとんど、アニメーションや武道をきっかけに日本語を勉強し始めた学生に、学習を継続させるうえで、教材選択も再考してみようというきっかけとなった。

運営委員会より**① 中東欧日本語教育研修会**

日時：2月18日(土)～19日(日)

場所：Goeth Institute

中東欧 12 か国 + 日本から約60名の日本語教師や日本語教育関係者がブダペストに集まり、今年も二日間の研修会で学び、情報交換し、旧交を温めました。

② ハンガリー文部省留学生総会

日時：3月3日 11:00～

場所：在ハンガリー日本国大使館

2007年に元留学生が互いの交流と日本－ハンガリーの友好を深めることを目的に発足した会で、今年もその総会に出席しました。今後、この会と MJOT が一緒に何かできる事を探していきたいと思っています。会の HP は以下です。

www.monbushodiak.hu**③ JFBP主催「日本のマンガ」三事業**

日時：3月6日(月)～8日(水)

場所：Mücsarnok, Bálint ház, その他

国際交流基金と京都精華大学の共催事業により 1)文化講演会、2)マンガに関する描き方教室、3)マンガ日本語教室がありました。6日夜は「マンガブームの原点となる日本マンガ文化」と題した講演会があり、会場はマンガに興味を持つ人であふれました。6日～8日に行われたマンガに関する描き方教室にはハンガリー全国から28名の方が選ばれ、精華大の先生のご指導のもと、素晴らしいマンガを描いていました。



写真提供：国際交流基金ブダペスト日本文化センター

④ 夏の日本語能力試験

日時：2012年7月1日(日)

場所：イギリス、ドイツ、ポーランド

申し込み締め切り：4月17日(火)

欧州でも年二回、日本語能力試験が実施されるようになりました。イギリスで受験を希望する生徒・学生がいる場合は以下のウェブサイトをご参照ください。

<http://www.jpj.org.uk/whatson.php#431>

その他の受験地を希望の場合は

http://www.jlpt.jp/application/overseas_index.html**⑤ 「基礎漢字練習帳1」発行**

漢字を絵で覚える漢字練習帳ができました。販売価格は1,200Ft.(会員価格900Ft.)です。この第一冊目には初級前半で学ぶ約百個の漢字を載せました。各教育機関での授業にお役立てください。コピーによる使用は厳禁です！

研修委員会より

日時：4月21日(土)14:00～

場所：国際交流基金ブダペスト日本文化センター

第31回日本語教育研修会が開かれます。詳細はMLでお知らせします。(後藤)

スピーコン実行委員会より**MJOT主催 第19回日本語スピーチコンテスト**

日時：3月11日 11:00～

場所：セント・ラスロー高校講堂

約150名の観客を迎え、素晴らしい日本語スピーチコンテストでした。スタッフとして協力して下さった皆さん、発表のご指導をしてくださった皆さん、そして、お応援に来てくださった皆さん、ありがとうございました。

(実行委員会一同)

MJOT 会報 26 号

発行：2012年4月13日

発行人：ハンガリー日本語教師会

編集：小野 久禎